



高僧の名



川崎ゆきお

小僧に毛の生えたような僧が山道を歩いている。実際に頭は剃ってなく、伸びるに任せている。長く山暮らしをしているため、保護の意味もある。髪の毛がないと怪我をするところだったシーンが何度かあるためだ。それでぼーぼーに伸ばしているわけではなく、目にかかると鬱陶しいので、適当に切っている。当然髭もそうだ。これは寒いとき、役立つ。

その若い僧、若僧が今回訪ねて行くのは高僧のいる寺だ。この学識の高い高僧は一箇所にいない。

山道が平らになり、一寸した沢に入ったとき、民家が見えた。田畑も少しだけある。

若僧は高僧の名を知らない。噂を聞いただけ。それはこれまでも何度かある。これがこの若僧の修行方法で、スタイルだ。同じ場所で、じっと本を読んだり経を上げるのではなく、高僧巡りをしているのだ。そして高僧ほど名が知られておらず、また町にはいない。その殆どが山野に散っている。

「高僧がいると聞いたのですが、お寺はありますか」

「ない」山男のような男が応えるが、若僧もそれに近い扮装なので、仲間と思われたのだろう。

「私は僧侶です」

「そうなのか。しかし、寺などこの近くにはないぞ」

「高僧がいると聞いたのです。学識豊かな人で、この国一だと。この国の人ではありませんが、見た目は分かりません」

「ああ、たまに酒を買いに来る人かね」

「その人はお坊さんですか」

「そうだよ。頭を丸めている」

「御名前は」

「キングマブッタさんだ」

「痛そうですねえ」

「他国の人だから、こちらの名前とは違うんだろう」

「その人はどこに住んでおられますか。寺ではないとすれば、この村に」

「いや、山の中腹に風穴があってな。昔は山の連中がたまに来ていたが、今はもう来なくなったので、その坊さんが入っているよ。修行しているんだろうねえ」

男は若僧を見晴らしのいいところに連れて行き、山の中腹を指差した。風穴は見えないが、煙が立っている。

「有り難うございました。行ってみます」

「弟子になりたいのなら、酒を買って行きなよ」

「はい、そうします」

若僧は竹筒と瓢箪に酒を入れてもらい、中腹へ向かった。

酒はどぶろくで、竹味と、瓢箪味になるらしい。極上は椰子らしいが、滅多に手に入らないよ
うだ。

風穴までの道は付いており、迷うことはなかった。昔はここと里とを結んでいたのだろうか。
山の人と里の人とが取引するために。

風穴はすぐに見付かった。煙が立っていたからだ。まるで狼煙だ。

高僧は芋を焼いていたらしく、落ち葉による焼き芋だった。

若僧は竹筒と瓢箪を出した。

「下で買ってきたのかな」

「そうです」

「それは有り難い。里のは高いので、芋焼酎を造ろうとしていたところじゃ」

「はい」

「それで、何かな」

「弟子にして下さい」

「拙僧を誰だと思っておる」

「この国第一の学僧だと聞いています」

「そんなことは聞いておらぬ。拙僧の名だ」

「はい」

「はいじゃない。名も知らぬのに、弟子に来たのか」

「知っております」

「じゃ、言えばいいじゃないか」

「それが」

「どうした」

「痛そうなので」

若僧はキンダマブッタとはどうしても言えなかった。

了